

ラサル文における結合価減少と格標示

—非意図用法を中心に—

並 木 翔太郎

札幌市立大学デザイン学部

抄録：本稿では、北海道方言における自発構文(以下、ラサル文)の意味構造における抑制と、当該構文における格フレームについて考察する。ラサル文は「非意図」「可能」「到達アスペクト」の3つの用法があり、「非意図」の用法では対応する他動詞文と結合価に変化がなく、「可能」と「到達アスペクト」の両用法では、対応する他動詞文と比較すると結合価が1つ減少し、当該他動詞文の目的語がラサル文では主語として生起するとされてきた。しかし、実例を詳細に観察すると、「非意図」の用法の場合でも対応する他動詞文の主語が生じることがない。本稿では、-(r)asar-が本来的には使役化接辞の-as-と自動詞化接辞の-ar-の2つの接辞によって構成されることを提案し、動作主と-as-によって導入される使役主が、-ar-によって抑制されると主張する。また、この提案に基づくと、加賀(2017a, 2017b, 2017c)が提案する格配列理論において、ラサル文の格フレームが現代日本語の格決定手順と同様に導かれることを論じる。

キーワード：北海道方言における自発態接辞 -(r)asar-, 外項抑制, 依存格アプローチ, 非意図性

Valency decreasing and case marking in the -(r)asar- construction: With special reference to its unintentional use

Shotaro Namiki

School of Design, Sapporo City University

Abstract: This article investigates the suppression of external arguments and case-marking in spontaneous constructions with -(r)asar- in Hokkaido. It has been assumed that (i) -(r)asar- has the three usages of unintentional, middle, and anticausative markers, and (ii) the construction with -(r)asar- as an unintentional marker involves no change in the valency of the verb. However, many attested examples show that the construction with the unintentional marker in fact causes suppression of the agent, as is the case with the middle and anticausative markers. The purpose of this article is to provide a principled account of the changes in the valency of the verb in the spontaneous construction with -(r)asar-. First, we decompose the spontaneous suffix -(r)asar- into the causative suffix -as-, which introduces an external causer, and the decausative suffix -ar-, which suppresses the external causer and the agent, leading to the change in the valency of the verb in the construction. It is then shown that our approach can also explain the case marking in the construction in accordance with the canonical case marking procedure in Japanese proposed by Kaga (2017a, 2017b, 2017c).

Keywords: Spontaneous Suffix -(r)asar- in Hokkaido Dialect, External Argument Suppression, Decompositional Approach, Dependent Case, (Un)intentionality

1. 緒言

本稿では、(1)のような北海道方言における自発表現について考察する⁽¹⁾。

- (1) a. 頼むからフォロワー外の人のツイート
見てる時にスライドで勝手にいいねボ
タン押ささるのやめてくれ…
b. 風強すぎて、風に押されて走らさる
c. 明日は休みで天気良くて給料日明けて
テンション上がらさる

(1)の文は、動詞語根に自発の接辞/-(r)asar-/が後接した構成になっている。(1a)では、意図せずスマートフォンを操作する指が「いいねボタン」に触れてしまうことで、当該ツイートに「いいね」がついてしまうことが表されている。また、(1b)は強い追い風によって体が押されるような状況にあり、自分の意思とは無関係に足を速く進めてしまうこと、(1c)は当該状況によって気分が良くなることをそれぞれ表している。

自発の接辞-(r)asar-には、(1)に例示されるような出来事が非意図的に生じることを表す用法の他に、可能を表す用法(2a)と、述語がもつ達成のAspectを到達のAspectに変える、いわゆる到達用法(2b)も観察されている((2a)は円山2007:58¹⁾、(2b)は佐々木2015:177²⁾より引用)。

- (2) a. この靴は小さすぎて履かさらない。
b. 大きな丸が描かさっている。

(2a)は靴のサイズが合わず履くことができないことを表す。また、(2b)は大きな丸が言語化されていないある場所に描いてあることを描写している。本稿では、(1)や(2)のような表現を総じて「ラサル文」と呼ぶことにする。

ラサル文に関して、本稿が着目する点は2つある。まず、佐々木(2015)が分析するように、ラサル文では、用法に関わらず、意味構造における「抑制」が生じている。例えば、(1a)では意図せずボタンを押してしまった動作主がいると解釈されるが、文の要素として明示されない。また、(2b)では大きな丸がどこかに生じるに至った原因となる出来事(誰かが丸を描くという出来事)が解釈されるが、構造上に現れることがない。次に、佐々木が観察するように、ラサル文では対応する他動詞

文とは異なった格フレームが用いられている。

- (3) a. いいねボタン |が/*を| 押ささる。
b. いいねボタンを押す。

(3a)のラサル文では、対応する他動詞「押す」の目的語に相当する「いいねボタン」にガ格が付与され、ヲ格の例は非文であると判断される。

ラサル文の意味構造における抑制については多くの先行研究で提案されてきたが、それらの提案はラサル文の格フレームに対する説明を守備範囲とはしておらず、ラサル文では対応する他動詞文とは異なった格フレームが用いられるということへの理論的説明が別途求められることになる。また、ラサル文の格フレームがどのように決定されるかに関する詳細な議論も、筆者の知る限り、なされていない。本稿では、ラサル文における最も典型的な用法である(1)のような例を考察対象とし、本稿の着目する2点への統一的な説明を試みる。具体的には、ラサル文の動詞語根が本来取るべき主語が抑制されることに対する原理的な説明を提案し⁽²⁾、本稿の主張に基づけば、ラサル文における格フレームが現代日本語の格付与の決定手順に沿って自然と生じることを示す。

本稿の構成は、次の通りである。2節でまず、ラサル文における意味構造の抑制に関する先行研究を概観し、当該研究の分析対象への観察に事実と異なる点があることを指摘する。3節では、前節での事実観察に基づき、本稿の提案するラサル文の抑制の仕組みについて説明する。4節では、3節の提案に基づき、ラサル文の格フレームが現代日本語の格付与決定手順に従うことを、加賀(2017a³⁾、2017b⁴⁾、2017c⁵⁾で提案された意味役割分析と格配列理論を用いて論じる。最後に5節で、本稿の結論を述べる。

2. ラサル文の意味構造における抑制

本節では、ラサル文の意味構造における抑制について、先行研究である佐々木(2015)を概観し、非意図を表す用法における事実観察の問題点を指摘する。佐々木(2015:177)は(4)を示し、(A)非意図を表す用法(4a)では、述語の結合価が対応する他動詞文と比べて変化しないこと、(B)主語の属性を表す可能用法(4b)や到達Aspectの用法(4c)では、ラサル文の主語が対応する非派生的

な他動詞文の目的語に対応し、もとの他動詞文の主語は削除されることから、結合価が1つ減少すること、(C)そして、いずれの用法においても対応する他動詞文とは異なった格フレームが用いられると観察している⁽³⁾。

- (4) a. 私は御飯が食べらさる。
cf. 私はご飯を食べる。
b. このペンはよく書かさる。
cf. 誰かがこのペンで何かを書く。
c. 大きな丸が描かさっている。
cf. 誰かが大きな丸を描く。

この観察に基づき、佐々木は役割指示文法(Foley and Van Valin 1984⁽⁶⁾)の枠組みから、ラサル文の派生を分析している。まず、非意図を表す用法と到達アスペクトの用法のそれぞれの図式化について概観する。

- (5) a. $\exists \Theta(x, [\text{pred}'(x)])$
b. $[\text{DO}(x, [\text{do}'(x)])] \text{ CAUSE } [\text{BECOME pred}'(y)]$
(佐々木 2015 : 201)

役割指示文法の論理構造において、非意図性は、意図性を表す DO が抑制されることで表される。また、到達アスペクトの特性は使役事象の統語構造への写像が抑制されることで表される。抑制は二重取り消し線で表示され、「削除」とは異なり、意味構造のレベルには依然として残ることを意味する。当該要素が意味構造のレベルに残るので、どのような行為が行われたのか、どのような行為によって状態変化が引き起こされるのかが、ラサル文では解釈できることになる。この点は、語彙的自他対応における自動詞(例：“割る”に対する)割れる、“溶かす”に対する)溶ける、“燃やす”に対する)燃える等)における抑制分析(Levin and Rappaport Hovav 1995⁽⁷⁾)と区別される。

- (6) $[\text{do}'(\phi)] \text{ CAUSE } [\text{BECOME pred}'(y)]$

(6)は語彙的自他対応の自動詞の語彙概念構造である。(6)は(5b)と異なり、使役事象の変項自体が抑制される(「 ϕ 」で表示する)ことによって、使役事象の情報が失われ、統語構造に反映されないことになる。佐々木の一連の分析は、到達アスペ

クト用法のラサル文では行為の様態を解釈できるが、語彙的自他対応の自動詞ではそれが不可能であることを、抑制の種類を分けることで適切にとらえている。

次に、可能用法のラサル文に対する佐々木の意味派生分析を概観する。

- (7) a. $(\text{Ev}(x \langle y, x \rangle))$
b. $(\text{Ev}^\wedge(x \langle y, x \rangle))$
c. $(\text{Ev}^\wedge(x^\wedge \langle y, x \rangle))$
d. $\lambda y(\text{Ev}^\wedge(x^\wedge \langle y, w^\wedge \rangle))$

(佐々木 2015 : 202, 一部変更)

(4b)を例にとると、Evは事象項、xは動作主、yはペンなどの道具、wは紙などの対象に対応する(7a)。抑制は「 \wedge 」によって表される。佐々木は、中間態的な可能用法のラサル文が個体レベル述語(individual-level predicate)であるとし、Kageyama(2006)⁽⁸⁾に基づき、対応する他動詞文の動詞の項構造における事象項Evが抑制される(7b)ことにより、随伴的に動作主xも抑制される(7c)。そして、ラムダ抽出によって属性記述となり、対象wも抑制される(7d)。このように、佐々木は、ラサル文のいかなる用法においても抑制は生じるが、非意図を表す用法や到達アスペクト用法では語彙概念構造、可能用法では項構造と、異なるレベルにおいて抑制が生じると論じている。

佐々木の分析は、3つの用法を持つラサル文を抑制という観点から包括的に分析し、それぞれの用法における意味的・統語的特徴を捉えている。しかしながら、実例を詳細に観察すると、非意図を表す用法におけるラサル文でも、結合価が1つ減少していると考えられる。佐々木は(4a)の「私は」を対応する他動詞文「私は御飯を食べた」における主語と同様に扱っているが、(4a)の「私は」が主語ではないことが、(8)の対比からも見て取れる。

- (8) a. * 私が御飯が食べらさる(こと)
b. 私が御飯を食べる(こと)
cf. 私がパンが嫌いなこと

(4a)の「私」が主語であるなら、(8b)のように主格を伴うことができるはずだが、(8a)が示すようにガ格は容認されない。(8a)の容認性判断に「ガ…ガ」の連続が影響している可能性も考えられる

している。まず、ar 動詞は意味的には動作主の存在が前提となっており、動作主が努力した結果としての事態を表す。(13)に示すように、当該動詞と行為を修飾する副詞表現が共起することから、当該動詞には動作主の行為が含意されていることが支持される。

- (13) a. (募金集めで) 難なく目標額が集まった。
 b. どうしても、この木はうまく植わらない。
 (影山 1996: 185)

次に、ar 自動詞は意味的には動作主を含意するものの、統語的には表示することができない。

- (14) a. * ボランティアの学生によって募金が集まった。
 b. * 市の職員によって桜の木が公園に植わった。
 (影山 1996: 187)

ar 自動詞は動作主を抑制する機能があるため、(14)のように、ニヨッテ句を用いても、動作主を付加詞的に表示することは容認されない。最後に、ar 自動詞は「わざと」や「～するために」といった、動作主の意図を指向する表現を伴うことができない。

- (15) a. * たくさんの募金がわざと集まった。
 b. * プライバシーを守るために、生け垣が植わっている。

以上の ar 自動詞に見られる特性は、(16)に示すように、ラサル文においても同様に観察される。

- (16) a. ゆめぴりかは本当に美味しいから、
 丼一杯は難なく食べらさる。
 b. * 子どもたちによって御飯が食べらさる。
 c. * 御飯がわざと食べらさる。

(16)が示すように、ラサル文は行為を修飾する副詞表現を許容する一方で、統語的に動作主を表示することも意図性を指向する表現を伴うことも許さない。(16)の事実から、-(r)asar-には自動詞化接辞の-ar-が含まれるという本稿の分析の妥当性

が裏付けられる。

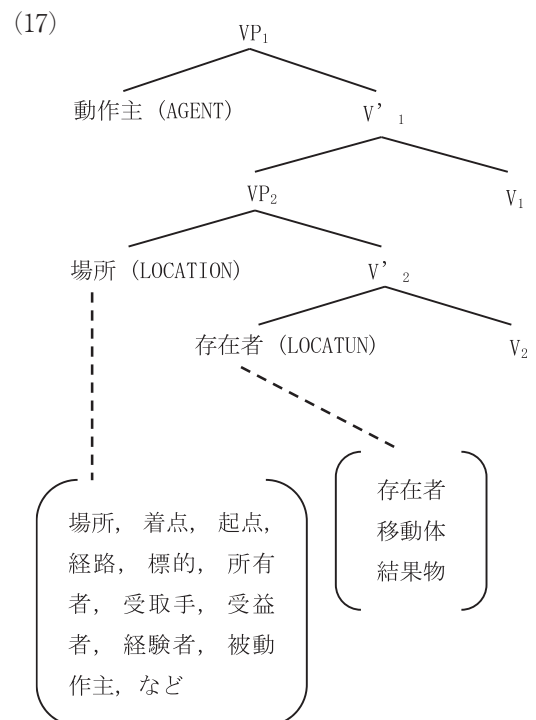
以上のように、-(r)asar-を使役化接辞-as-と自動詞化接辞-ar-に分解することで、ラサル文が外的要因を含意し、非意図的な事象を表す一方、外的要因や動作主が統語的に表示されない事実が、それぞれの接辞の基本的な機能に無理なく還元される。これにより、先行研究で観察されてきたラサル文の「非意図を表す」という意味的機能と、(8)で指摘した結合価の減少を適切に捉えることができる。以下では、本稿の提案に基づき、加賀(2017a, 2017b, 2017c, 2018)の一連の研究で提案された格配列理論の枠組みにおいて、ラサル文の格フレームが、他の一般的な日本語表現と同様の格付与決定手順によって決定されることを示す。

4. ラサル文における格フレーム

本節では、日本語の格配列に対する加賀(2017a, 2017b, 2017c)の理論について概観したのちに、本稿の考察対象であるラサル文における格フレームも一般的な日本語表現と同様の過程を経て産出されることを示し、本稿の提案の妥当性を示す。

1) 意味役割分析と格配列理論

Kaga(2007)¹⁴⁾は、(17)に表示されるような統語構造と意味役割の対応を提案している⁵⁾。



Larson 流の動詞句階層構造に、自ら動作や行為を行い、他者に働きかける《動作主》、文字通りの場所や影響の受け手としての《場所》、そして、《場所》と存在という関係性を結ぶ《存在者》、これら3つのマクロな意味役割が、項の最上位であるVP1の指定部位置、VP2の指定部位置、VP2の補部位置にそれぞれ配置されている。

ここで、加賀が《場所》には〈被動作主〉(patient)のマクロな意味役割が属すると分析する点に着目されたい。従来の意味役割に関する分析では、〈被動作主〉は〈移動体〉と平行的に扱われ、どちらも変化主体として捉えられてきた。しかし、加賀は竹沢(2000)¹⁵⁾の分析を援用しつつ、(18)の例を示し、〈被動作主〉と〈移動体〉は峻別される必要があると論じている。

- (18) a. 太郎が車_iをアメリカに_i2台送った。
 b. * 太郎が車_iを真っ赤に_i2台塗った。

(加賀 2017b : 141)

(18a)では車が〈移動体〉として、(18b)では状態変化の主体、すなわち〈被動作主〉として捉えられるが、「2台」という遊離数量詞の認可に関して差が生じる。(18)の文法性の差は、「車」と「2台」の相互c統御関係締結の可否に還元されることから、〈被動作主〉要素と〈移動体〉要素が基底生成において異なる位置で生成されることを示している。加賀は(18)の事実から、〈被動作主〉が《場所》の位置に属すると提案し、〈被動作主〉を影響や変化が生じる比喩的な場所と説明している。

加賀(2017a, 2017b, 2017c)の一連の研究では、日本語の格について、(17)の統語構造に基づき、「依存格」(dependent case)アプローチ(Baker 2014¹⁶⁾)を援用して、(19)の格付与決定手順を提案している。

- (19) 動詞句内の領域において
- i. 動詞の語彙特性に基づき、当該の項に語彙格・内在格を与えよ。
 - ii. 指示性をもつ最上位の項にガ格を与えよ。
 - iii. 指示性をもつ最下位の項にヲ格を与えよ。
 - iv. 残りの項にニ格を与えよ。ただし、す

で同一領域で「ニ」が与えられた場合を除く。(非該当条件(elsewhere condition))

加賀は(17)の構造を仮定し、Larson 流の動詞句の構造内に《動作主》、《場所》、《存在者》の要素が基底生成されると仮定することから、動詞句内という領域において名詞句に格が割り振られることになる。(19)では、語彙格ないし内在格の付与が先行して行われ、その後に、(17)の階層関係に基づき、「ガ」「ヲ」「ニ」の構造格の付与が決定することを示している。語彙格や内在格の付与が先行して行われるのは、(20)のような例が、動詞の語彙的特性により一定の意味役割を持つ項が特定の格を受け取る事例であり、一般的な格付与規則では予測できないためである。

- (20) a. 花子に英語が分かる。
 b. 犬が太郎にかみつく。
 c. 花子が浜辺を歩いた。

(加賀 2017b : 148)

次に、(ii)のガ格付与について、ガ格は「最上位の名詞句」に付与されるので、(17)に示すように、《動作主》要素がある場合の(20b, c)では、その要素にガ格が付与される。(20a)では、《場所》要素である〈所有者・経験者〉の「花子」に語彙格が付与されているため、残る《存在者》要素の「英語」にガ格が振られることになる。

(iii)および(iv)の適用について、(21)を例に概観する。

- (21) a. 先生が太郎に賞を与えた。
 b. 太郎が花子にその本を貸した。

(加賀 2017b : 149)

(21)は、《動作主》、《場所》、《存在者》の3つの要素を含む例である。まず、(20b, c)と同様に、最上位の項である《動作主》要素にガ格が付与される。次に、〈移動体〉である「賞」や「本」は《存在者》要素であり、(17)にあるとおり、《存在者》は最下位の名詞句に該当するため、ヲ格が付与される。さらに、現段階では〈受取手〉としての《場所》要素である「太郎」や「花子」が格を受けていないので、(iv)の適用により、ニ格が付与されることになる。

以上、本節では、加賀によって提案された、日本語の格付与決定手順について概観した。以下では、本稿の提案に基づけば、(17)および(19)の枠組みにおいて、ラサル文の格フレームが自然と導き出されることを示す。

2) 分析

本節では、前節に基づき、非意図を表すラサル文における格フレームの決定手順について、(1)の例文を中心に分析を行う。(1)を(22)に再掲する。

- (22) a. 頼むからフォロワー外の人ツイート
 見てる時にスライドで勝手にいいねボ
 タン押ささるのやめてくれ…
 b. 風強すぎて、風に押されて走らさる
 c. 明日は休みで天気良くて給料日明けで
 テンション上がらさる

本稿では、-(r)asar-は使役化接辞の-as-を含むことから、ラサル文は使役文の構造(「ある原因のせいで、誰かが何かをする」という構造)を持つと仮定することになる。日本語には、(23)に示すように、ヲ使役文とニ使役文の2種類が存在し、両者は異なる構造を持つと分析される。

- (23) a. ?? 花子が太郎をボタンを押させる。
 b. 花子が太郎にボタンを押させる。
 (24) a. 花子が太郎を走らせる。
 b. 花子が太郎に走らせる。

多くの先行研究では、ヲ使役は強制的な使役であるのに対して、ニ使役は許容的な使役であると論じている(Shibatani 1973^[7])。他動詞使役文はニ使役が用いられることが一般的で、国立国語研究所(1964)^[8]によると、ヲ使役文が用いられる例はほとんどない。一方、自動詞使役文では、(24)に示されるように、どちらのタイプも許容される。なお、(22c)の非対格動詞「上がる」は、語彙的使役「上げる」と対をなす動詞であることから、通常の他動詞文の構造を想定する。

加賀(2017c)は、両タイプの使役文において、(24)の例と被使役者に無生物要素を用いた例を分析し、ヲ使役とニ使役の構造における違いを論じている。

- (25) a. 太郎が野菜を腐らせる。
 b. * 太郎が野菜に腐らせる。

(25)が示すように、ヲ使役は無生物要素を被使役者に取りることができるが、ニ使役はそれができない。ヲ使役が強制的、ニ使役が許容的な使役をそれぞれ表すことから、ヲ使役における被使役者は「当該要素の意向を伴わないモノ」、ニ使役では「当該要素の意向を伴うモノ」とみなすことができる。実際、(26)の文法性の差が示すとおり、無生物要素は複節構造「[V する(という)こと]をした」に生起できない。

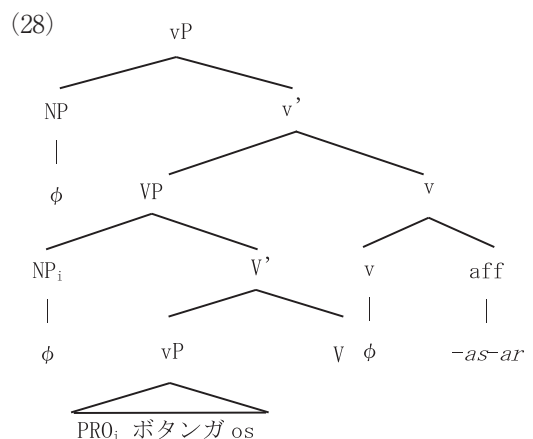
- (26) a. 太郎が走る(という)ことをした。
 b. * 野菜が腐る(という)ことをした。

以上の議論から、加賀は、ヲ使役は単節構造を持つものに対して、ニ使役は複節構造を持つと分析している。

- (27) a. 花子が 太郎を 走 r-ase-ru
 b. 花子 が 太郎に [PRO_i 走る]
 v-ase-ru

(25b)は「花子が太郎に対して「太郎が走るということ」をさせる」という構造として解釈される。以下では、加賀の分析を援用し、(22)の格付与決定手順を見ていく。

まず、(22a)について見てみる。



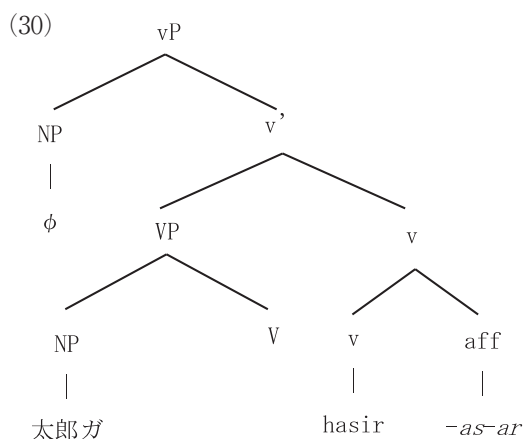
3節で議論したように、-(r)asar-は使役化接辞の-as-を含むことから、(23)に示すように、迂言的使役形の「押さる」が用いられた構造として、「誰かが誰かにボタンを押させる」に相当する構造を

想定する。他動詞使役文は二使役のみ用いられることから、音形を持たない空の動詞「 ϕ 」を含んだ複節の構造になる。音形を持たない空の動詞によって PRO が想定され、被使役主がある種の動作主性を含むことになり、被使役者の意向が尊重されるという許容使役の解釈が生じる。そして、自動詞化接辞の -ar- によって、外項である使役主項と被使役主項が抑制され、残った「ボタン」が最上位の項となり、(19)の(ii)に従い、ガ格が付与されると分析される。

次に、(22b)について見てみる。自動詞使役はヲ使役と二使役の2種類が想定される。加賀の議論にあるように、ヲ使役における被使役者は当該要素の意向を伴わないものとみなすことができるので、ヲ使役の被使役者には動作主性がないことになる。このことから、ヲ使役の単節構造に基づくラサル文であれば、被使役要素は動作主性がないので、当該要素は -ar- の抑制対象にならないと予測できる。実際、(22b)のような非能格動詞の例では、主語を取ることができる。

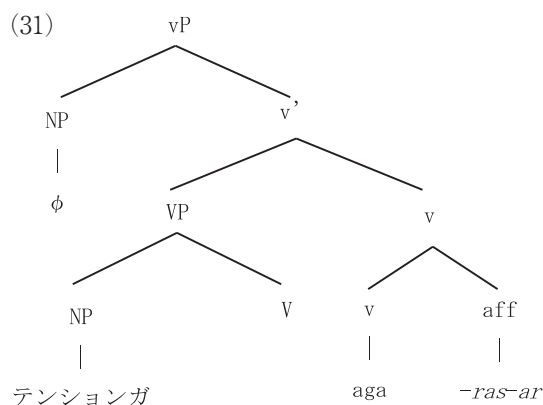
(29) どんなに遅刻しても、[太郎が走らさること]はない。

このことから、(22b)は(30)のような単節構造を持つと分析できる⁽⁶⁾。



-(r)asar-における使役化接辞の -as- によって使役事象が導入されるが、-ar- によって外項が抑制され、残った「太郎」が最上位の項となり、ガ格が付与されることになる。

最後に、本稿の分析に基づく(22c)の構造を以下に示す。



(31)では、使役化接辞-as-によって他動詞文の「何がテンションを上げる」に相当する構造を仮定している。そして、自動詞化接辞-ar-によって、外項が抑制されることにより、内項に生起する「テンション」が指示性のある唯一の項となり、ガ格が付与されることになる。

(19)の格付与決定手順には、(i)語彙格および内在格が与えられる場合は、構造格に先行して行われることが規定されている。本稿では、ラサル文は(19)の手順に従うと論じていることから、当該規定も他の規定と同様に従うことが予測され、この予測の妥当性が(32)の実例によって示される。

- (32) a. なんか、黄色い線の上を歩かさる。
 b. * なんか、黄色い線の上が歩かさる。

(32)は、駅ホームの黄色い点字ブロックの上をつい歩いてしまうことが表されている。「黄色い線の上」に付与されるヲ格は「経路ヲ格」と呼ばれ、語彙格に分類され、構造格の付与に先行して与えられる。(32b)は、いわゆる「総記のガ」としての主題化された解釈(「他ではなく、黄色い線の上」の意)でない限り容認されないことから、語彙格を伴うラサル文も(19)の格付与決定手順に従うといえる。

以上、本節では、3節での提案に基づき、ラサル文における格フレームの決定手順について論じた。これまでの先行研究では、ラサル文の格フレームが特異的に捉えられていたが、本稿の提案に基づき、かつ、加賀の分析を援用することで、ラサル文の格付与決定のプロセスが、他の日本語表現同様であることが明らかになった。

5. 結論

本稿では、北海道方言における自発態接辞-(r)asar-が、使役化接辞の-as-と自動詞化接辞の-ar-から成る複合的な接辞であると主張し、ラサル文の最も典型的な解釈である「外的要因による使役事象」の意味が-as-に起因すること、そして、外的要因を表す項が統語的に表示されないのは、自動詞化接辞の-ar-が本来的にもつ抑制の機能に起因するからであることを論じた。また、先行研究において、非意図を表す用法では、ラサル文と対応する他動詞文との結合価に変化がないと観察されてきたが、当該用法であっても動作主が抑制さ、他の用法と同様に結合価が1つ減少する事実を指摘した。そして、本稿の主張に基づけば、ラサル文の持つ格フレームも、加賀が提案する日本語の格付与決定手順に従って産出されることを示した。

謝辞

本稿は、2018年9月4日に筑波大学で開催された加賀信広教授還暦記念言語学特別ワークショップ『『られる』と『らさる』の言語学：日本語の受動文・関連構文をめぐって』における口頭発表「北海道方言『ラサル』における結合価と格付与」の内容を加筆修正したものである。発表に対して質問・コメントを下さったすべての方々に感謝申し上げる。また、2名の査読者の方々からの数多くの貴重なご意見を頂戴し、そのおかげで本稿は内容・構成・表現のすべての面で改善された。心より感謝申し上げる。なお、本稿はJSPS科研費21K12986の助成を受けている。

注

- (1)以降の例文について、引用文献が明記されておらず、容認性判断について言及のないものは、すべてTwitterより実例として収集し(最終アクセス：2018年8月1日)、インフォーマント調査を行ったうえで容認されると判断されたものである。
- (2)非意図用法と到達アスペクト用法における結合価と格フレームは並行的であることから、本稿の分析は到達アスペクト用法にも無理なく適用可能であると考えられ、詳細は別稿にて論じる。一方、可能用法については、佐々木(2015)が分析するように、他の2つの用法とは述語の性質が大きく異なることから、ここでは扱わない。
- (3)例文(4b)は対応する他動詞文の目的語が言語化されていないため、結合価が2つ減少しているよう

に見えるが、(i)のように対応する他動詞文の旧目的語をカ格で表示させることができる。

- (i) このペンはきれいな字が書かざる。(=このペンだときれいな字が書ける。)
- (4) (4a)の「私は」は主題であり、格の対応によってではなく、(i)のような aboutness relation (Saito 1985⁹⁾)によってつながっていると考えられる。
 - (i) a. 魚は 鯛が いい
 - b. [_s Topic [_s ……]]
- (5)加賀は、《場所》に属するミクロな意味役割のうち、〈所有者〉、〈受取手〉、〈受益者〉、〈経験者〉、〈被動作主〉を「影響を受けた《場所》(affected LOCATION)」と定義している。当該概念は、日本語における二格の直接受動文の成立条件などを解き明かす際に重要な役割を果たしている。本稿では、当該概念が直接的に関わることがないことから、議論を簡潔なものにするために、当該概念に触れずに議論を進める。
- (6)非能格動詞が用いられるラサル文では、なぜ二使役ではなく、ヲ使役の構造に基づき派生されるのかについては、国立国語研究所(1964)¹⁸⁾の指摘にあるように、実際に用いられる自動詞使役文のほとんどがヲ使役文であることと関係があるかもしれない。しかしながら、現状では原理的に説明する術がないため、今後の研究課題としたい。

文献

- 1)円山拓子：自発と可能の対照研究—日本語ラサル、北海道ラサル、韓国語 cita 一。日本語文法 7(1)：52-68, 2007.
- 2)佐々木冠：北海道方言における形態的逆使役の類型論的位置づけ。中村涉, 佐々木冠, 野瀬昌彦 編, 認知日本語学講座第6巻 認知類型論。くろしお出版, 東京, pp. 163-211, 2015.
- 3)加賀信広：日本語二受動文における受影性の起源—意味役割理論と格配列理論からの帰結—。JELS 34：56-62, 2017a.
- 4)加賀信広：日本語受動文の統語構造再考(2)。文藝言語研究 言語篇 69：133-162, 2017b.
- 5)加賀信広：日本語間接受動文の被害性と格配列理論。日本言語学会第154回予稿集：336-341, 2017c.
- 6)Foley, W. A. and Van Valin, R. D.: Functional Syntax and Universal Grammar. Cambridge University Press, Cambridge, 1984.
- 7)Levin, B and Rappaport Hovav, M.: Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface. The MIT Press, Cambridge, MA, 1995.
- 8)Kageyama, T.: Property Description as a Voice Phenomenon. Kageyama, T. and Tsunoda T., Voice and Grammatical Relations. John Benjamins, Amsterdam, pp. 85-114, 2006.
- 9)Saito, M.: Some Assymetries in Japanese and their Theoretical Implications. PhD thesis. MIT, 1985.

- 10) 高橋英也：「東北・北海道方言におけるラサル形式の形態統語論について」2015.
https://www.researchgate.net/publication/302596601_dongbeibeihaidafangyanniokerurdongbeibeihaidafangyanniokerurasaruxi 2022年7月28日(アクセス日)
- 11) 石垣福雄：北海道方言における動詞の活用について. 国語学 34 : 1-11, 1958.
- 12) 大野公裕：北海道方言「ラサル」の形態統語論. 日本言語学会第152回予稿集 : 138-143, 2015.
- 13) 影山太郎：動詞意味論：言語と認知の接点. くろしお出版, 東京, 1996.
- 14) Kaga, K.: Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax. Kaitakusha, Tokyo, 2007.
- 15) 竹沢幸一：空間表現の統語論一項と述語の対立に基づくアプローチ. 青木三郎, 竹沢幸一, 空間表現と文法. くろしお出版, 東京, pp. 163-214, 2000.
- 16) Baker, M.: Case: Its Principles and Its Parameters. Cambridge University Press, Cambridge, 2014.
- 17) Shibatani, M.: Causativization. Syntax and Semantics 5: 239-294, 1976.
- 18) 国立国語研究所：現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析. 秀英出版, 東京, 1964.